

御 楼 門

写真『明治初年の鶴丸城』（前頁参照）は、1872年5月、藤崎正高撮影匠が、鹿児島城の屋形の御楼門と御兵具所（※武具を置いてある所）を正面、ほぼ東南側から撮影したもので、写真集『鹿児島勝景撮影』に収められ、東京国立博物館にフィルムが保管されている。

鹿児島城の本丸跡は翌1873年中枢部の屋形を焼失し、4年後には二之丸跡も焼失した。

藤崎は御楼門から御角櫓（※城壁の四隅に建てられた見張り台）までを東側から写してもおり、『鹿児島勝景撮影』は、廃藩置県直後の鹿児島城の威容を写している。

御楼門は鹿児島城の屋形の表門である。大藩の表城門は普通なら石垣と一体的な渡櫓（※石垣と石垣の間を渡す櫓門）門等造りの柵形を構成するものだったが、鹿児島城では御楼門としたのであった。柵形とは、四面囲みの空間に誘導し、通路を曲げる仕組みで、主に城の出入口に置かれた。

鹿児島城では、城外から堀を渡り、城への入口の柵形に入る位置にこの御楼門がある。そして柵形の内側に唐門が置かれた。外側に御楼門が設置されているのは、鹿児島城の防衛力を見せつけ、城外にその姿を見せ、島津氏の72万石の大藩の格式を示した。

門の両側に番所を置いてもよかったが、片側にのみ番所を置いて、幕府に対する慎みを示した。

御楼門は、屋形の建設と同時に着工され、1606年には原型ができあがり、1690年に本格的に完工した。その最初の本格的御楼門は1696年に焼失し、1707年には再建された。それから

137年後の1844年に建替えられ、1873年屋形の焼失時に再び焼失する。今年2020年、写真を主な手掛かりとして、13年かけて復元され、その英姿が147年振りに再現された。

御楼門の性格は、藩主格以上の者と藩の上位の家臣の入退城の際だけ通れる門であり、鹿児島城では、寄合並以上の百人程に通行が許されていたに過ぎない。鹿児島城では最も格式の高い門で朝6時開門、夕方6時閉門で、通過しようとする者は門番によってチェックされ、通常はここで下馬させられた。下馬の位置は身分役職で差があり、高齢者・身障者にはそれぞれに相応しい待遇が定められていた。いずれの場合にも従者がおり、その扱いは門番の気を遣うところであった。

御楼門の姿は、高さ、幅各20m程、奥行き7m程の二重二層の櫓門で、上層は本瓦葺、棟の長い入母屋破風屋根、下層は四方葺き降ろし屋根、上層正面は連子窓、外壁は漆喰塗、海鼠壁で、屋根の隅には鬼瓦、大棟には大鯨が載っていて、外から石垣とは独立した門に見えた。鏡柱(正面中央2本の柱)は断面88×60cm程、冠木(正面の梁)は76×88cm程、敷梁(冠木の奥に平行する梁)は直径90cmの丸太とした、この巨木は、国内各方面の協力で、国産ケヤキ材を当てることができた。このような巨木の使用は近年の木材建築界ではまことに珍しいことと驚かされている。藩政期に御楼門建設を行うのは、その材木の確保だけでも大変なことだったと思われる。